

## 父の眠る沖縄

水窪町遺族会 知久勝宣

あの悲惨を極めた大戦が終わりを告げて 77 年、過ぎし大戦においてひたすら祖国の隆盛どうぼうと同朋の安泰を念じつつ、一身も顧みず危地に赴き艱難辛苦かんなんしんくに耐えながら奮戦され、戦場に散華された戦没者の皆様のご無念に思いをいたす時、私たちは永遠に忘れることの出来ない痛恨の極みであります。

私の父は昭和 20 年 6 月 20 日、沖縄で戦死し帰らぬ人となりました。私が 3 歳の時でした。早いもので私は 80 歳になりました。

父が最後に母宛てに出された手紙には「一人十殺一戦車」「一飛一艦」「一艇一船」の合言葉でますます闘魂を高め頑張っています、という文書で、沖縄県なかがみぐんちやたん中頭郡北谷村嘉手納、暁第一六七四一部隊ホ隊、知久良一 と書かれ、もう暫く手紙は出せないと言う父からの最後の手紙でした。昭和 20 年 4 月、沖縄戦は太平洋戦争最初で最後の地上戦で、民間人を巻き添えに歴史に残る戦いで「鉄血勤皇隊 ひめゆり部隊」も犠牲に含まれ、父は、ここ沖縄の地で帰らぬ人となりました。

その後の、父亡き母は、私達幼い 6 人の子供をよく育ててくれたものと思います。苦勞した母も、父の戦死から 13 年の命で若い母の死でありました。

終戦間もない頃の両親のいない生活は、私達にとりまして苦勞の始まりでした。私も職場を変えながらも働かなければ生活が出来ないとの気持ちで、無我夢中で頑張り、会社を立ち上げ現在に至っております。私にとりまして人生波乱の 60 年間でした。

親孝行したいときには親は居らず、苦勞した母に対しても何もしてあげることが出来ないことが私にとりまして残念です。

今後、私達夫婦、子供、孫が先祖を祀り供養することが両親に対する何よりの責務と思っています。戦争を知らない世代が国民の 8 割超となり、戦争の記憶が風化しつつある今こそ平和のありがたさ、御霊の心を心として感謝の心と戦争の悲惨さを後

世に語り継ぎ、日本の恒久平和と繁栄を築くために精進努力することが私たちの務めであります。

## 母を想う

水窪町遺族会 井水正勝

私は昭和 17 年 1 月に井水寛武の長男としてこの世に生まれ、その時既に父の弟清寛は志願兵として横須賀の海軍に入隊しておりました。その後 19 年 9 月 24 日ソロモン諸島において戦死、当時 20 歳。父親は終戦の前半に召集兵と

して満州に出兵され、私は父と接した覚えは残る写真で想像する程度でした。

20年8月15日終戦を迎え、先に除隊された兵隊さんが井水君も間もなく帰ってくると家に立寄り伝えてくれたと聞いておりましたが、21年9月21日朝鮮興南収容所病院において死亡の報告を受けました。

母は病弱な体で父を待ち続けていましたが、昭和22年7月3日にこの世を去りました。

私は祖母と二人だけの生活となり、祖母はこの10年の間に10人の葬式を出したと聞いております。

残された家族は私と祖母の二人だけとなり、今思うと、祖母の心境は如何ばかりかと想像がつきかねます。当時祖母の年齢は57歳、元来心の強い人でしたので弱音は言いませんでしたが、母の葬儀の終わった翌日の朝、祖母と二人で裏の川へ洗濯に行った時、祖母の眼から2、3滴の涙が出ている様子を私ははっきり覚えております。その時の心境は母の死で二人だけになった悲しさと、これからの生活、5歳位の子供をどう育てていけば良いのか、さぞ苦しい胸の内があ那时的涙だったのかと想像されます。

祖母は、それからは生活のために自分の実家へ農業の手伝いに行き日当で収入を得たり、ある時は工事現場へ出て土方の手伝い等したり、色々の仕事をして収入を得ておりましたが、幸いにして祖母は豆腐を作る技術があり、豆腐屋さんに勤めるようになり生活を支えてくれました。楽な生活ではなかったけど、私と二人の生活は自由で気楽で、前向きな性格でしたので今日駄目なら明日がある・というような考え方の祖母でした。

私も昭和43年26歳になり、同年代の女性と結婚することになり、祖母は昭和22年以来家庭を守ってきましたが、新しい私の妻に家事の仕事を引き渡すことになり、21年間本当にご苦勞様と感謝の気持ちでいっぱいでした。その後は私の子供ひ孫二人を可愛がってくれましたが、昭和40年12月28日82歳で永眠致しました。長い間ありがとうございましたと感謝の気持ちしかありません。

今思うと、生存中に靖国神社へ祖母を連れて行きながら東京見物でもしてやりたかったと、後悔しても何もできません。

故人となりました島倉千代子さんが歌った「東京だヨおっ母さん」の歌を聞くたびに祖母を思い出します。

当り前の平和に

水窪町遺族会 大藤積平

テレビのニュースでロシアとウクライナ戦争の様子を見るにつけ、多くの人

命が失われ、建物の破壊等に恐ろしさを感じる。

さて、今年には戦後 77 年となり、沖縄復帰 50 年となる。

私は戦死により遺児となった大藤家の一人娘に婿入りしたが、義父については一枚の写真しか見たことがなかった。そこで、義父についてももう少し知りたいと思い、遺品がないか捜した。今はなき義母の小物入れの中に、茶色に変色したハガキ 5 通が丁寧に保管されていた。

昭和 13 年の消印があり、検閲の押印もあることから、言論が統制されていたことがわかる。限られたスペースからはみ出さんばかりの細かい字で綴られ、読むのに苦労した。伝えたいことがいっぱいあったことがわかる。その中の一通を紹介する。

「ちよ（妻）さん、度々故郷の懐かしきお手紙ありがとうございます。ご慈愛のこもった文を読みいじらしく思いました。友人の Y B の所在地もありがとうございます。又弟の下宿地の番地をお知らせください。S H 君も T Y さんと祝言をあげられたとか、早速お祝いの文を出します。家にいたころは、我儘放題でしたが、今は軍務に精励致しております。山間地出身故に靴傷一つ作らず元気そのものです。同郷の A E 君も同じ隊に居り、演習の点呼後の寸暇に故郷の話に花を咲かせています。

今の農業は馬鈴薯造りの真っ最中でしょうが余り無理をせず、軍人の妻として後に残せし娘の保育に全力を尽くしてください。僕も面会は到底出来ぬものと思うから、朗らかな顔の写真を送るので、ブックに貼付して置いてください。消灯お休みください」

故郷の懐かしさが詰め込まれているが、厳しい軍隊生活は知ることが出来ない。

「欲しがりません。勝つまでは」の標語のとおり全ての国民もじっと我慢した。結局義父は戦死した。敗戦となり、水窪でも多くの人が祖国の為に尊い生命を捧げられ、生活必需品である衣食住まで欠乏した。

わが家でも主を失い、家族の平和は崩れた。年老いた祖父が父親代わりとなった。現在の日本は物価高というものの飽食の時代で、物を大切にする気風が薄らいできている。野菜などは、形が悪いだけで商品化できないという。こんな時代だから、もう一度戦争の苦しみを知る為、水窪に近い長野県阿智村の満蒙開拓記念館を見学しようと思っている。

以前見学したときは、満州開拓の背景と実情を知ることが出来た。特に敗戦後の過酷な逃避行で、帰国できた人は半数弱といわれ、言葉では言い尽くせな

い悲惨さを垣

間見ることが出来た。

ウクライナ情勢から考えて、平和でなければ、当り前の人生を歩むことが出来ないことを知ることが出来る。

### 戦争をかたらなかった義母

水窪町遺族会 高木園乃

1945年8月15日終戦

戦後70年を迎えて、各メディアが伝える戦争の悲惨さをしみじみと思いながら、遺族であった祖母、義母、主人が決して戦争中の詳しい体験や暮らしの事を語ることは無かった事に思いを馳せた。

義母が亡くなって20数年たった今、義母達の戦中戦後の思いが今になって心の中に甦って来るのです。長年の重労働で痛めた膝に灸治療をしている祖母を家に残して、恒例の月2回の寺参り墓参りに義母と出掛けた。寺参りを済ませ、暮れに手向水、香花を供えた義母は、墓石をつくづく眺めながら「夫は自分でこの墓を造り戦争に行きそのままこの墓に帰って来たのよ」と。

戦争のニュースやテレビは見る事も無く、語る事の無かった義母から、遺族の言葉を初めて聞いたのでした。ずーっと深い悲しみを抑えていたのだろう。義母の眼に白く光る涙をこの時見逃す事は出来なかった。

意味の分からぬ緊張感とどうする事も出来ない心の動揺が全身を硬直させた記憶は今でもはっきり覚えている。

義母と2人でドライブした時には、「私には青春の一部が壊されてしまったのよね」と笑顔で語られたその奥には、悲しみ苦しさから打ち勝った誇りの様な表情が見えた様に感じたものでした。そして又、語り継ぐ思いや平和への願いを私に伝えてくれた一瞬でもある様に思って、この責任を受け継いでいかなければとも感じました。

義母の70年の人生は祖母との二人三脚で4人の子供を育て、遺族年金、特別給付金を戴きながら、僅かな不動産で賄って生活は出来ましたが、それ以上に、男手の無い家を守り、小さな町で農業を続けていくには体力的、精神的な負担は想像を絶するものがあったと思います。

また、小野田少尉の帰還のニュースを見て「今頃帰って来てくれても私は嬉しくもないわ、却って戸惑う思いだわ」の言葉に当事者ではない私には返す言葉もありませんでした。

晩年苦しさや痛みの病床の中で「やっぱり父さんに逢いたかったわ」とか細

い声で枕を濡らしていた時、初めて語った義母の最後の本音の言葉だったであります。今でもその時の私の衝撃は全身「鉛」に釘付けられた言葉となって残っています。

護国神社・靖国神社への参拝には「手向け水」を持って英霊に供え、祖母、義母、主人の思いを、嫁の私が子や孫に語り継ぎ平和である事の大切さを、ずっと（末永く）祈り続けたいと思っています。

### 叔父を偲ぶ

### 水窪町遺族会 竹下裕二

何年か振りに、手元にある戸籍謄本と仏壇に祀ってある「繰り出し位牌」を調べました。

戸籍謄本 竹下 繁

群島ガダルカナル島堺台西北側高地において戦死 中部第二部隊長鈴木榮助  
報告

昭和 18 年 9 月 21 日受付（大正元年 12 月 25 日生）

碑 空錦光院義芳繁道居士

昭和 17 年 12 月 4 日 陸軍軍曹 竹下 繁 ガダルカナル島ニテ戦死

叔父の兵役はいわゆる徴兵検査で甲種合格、2年の兵役を終え、職は大工で、召集による兵役につくまでは浜松市野口町で就職、盆暮の帰郷は自転車で野口町から水窪を往復しておりました。

思い出 1 当時の 152 号線は勿論無舗装、特に横山では天竜川に橋はなく、船で往復（渡船）という不便極まりない道路事情の中、体力気力にものをいわせ汗だくだくでペダルを漕ぐ叔父の姿。その自転車を無断借用し狭い庭で乗り回し、何回か転倒して叱られたこと、思い出は走馬灯のごとく。

思い出 2 私は国有林関係に就職し、昭和 54 年より 2 年間秩父宮林署に勤務。この間縁あって地元の住職と知りあい、ある時、大東亜戦争ガダルカナル戦の話となり叔父がこの地で戦死したことを話すと、住職は偶然にもガダルカナル島方面に慰霊と遺骨収集団の一員として参加しその折ガダルカナル島の海岸で貝を拾い、持ち帰り寺で祀っており、ガダルカナル島で戦死したのであれば遺骨は勿論、故人の身の回りの物は一切無かったと思うから、叔父の形見として祀るようにと「貝」を授かった。帰省の折持ち帰り、この次第を両親に話して仏壇に祀り、一日としてお茶・線香を絶やしたことはありません。

思い出 3 叔父は召集後陸軍軍曹に昇進。戦地に赴く前、家に軍刀を所望、

祖父、父が思案の結果、遠縁に当たる草木（地名）の現守屋彰方をお願いしたところ、快諾の上「刀一振り」と研磨料、鞘代として当時としては破格の金子を賜り、家では急ぎ軍刀を仕上げ、陸軍軍曹竹下繁に届けた次第で、今回静岡県護国神社遺品館に展示する遺影に、その軍刀を携えた叔父の写真をお願いしました。

思い出4 私が住む地域には小学校が所在し約80戸程ですが、この地区で大東亜戦争での戦没者霊（8柱）を同一敷地に祀っております。特に盆、正月、誰に言われたわけではありませんが、ここ何年か自宅の墓と共に一時間ほどかけて清掃しています。清掃後は改めて戦没者8柱の霊に、郷土の為、国の為に想像を絶する苦難と戦い

若くして散った諸霊に思いを馳せながら感謝し、深い祈りを捧げています。

終わりに、水窪町史「出征軍人を送る」の項より抜粋、一読して欲しく加えます。

「出征軍人の中には一人息子もあった。一家の柱として父母や妻子を養っておられる方もあった。また少年の面影を残している青年もあった。夜には親戚、組合、友人が集まって壮行会を催し、「後のことは心配なく立派な手柄を立ててくれ」とみんなで励ました。地区の婦人の人々は弾よけの腹巻、千人針を縫った。死（四）線を越えるようにと五銭玉（当時の通貨）を、また苦（九）線を越えるようにとの願いを込めて十銭玉をいくらか縫い込んだ。隣組の人々は手分けで百社参りをして戦勝を祈願した。

出征の日には、軍服に寄せ書きの日の丸の旗をたすきにかけ、「祝出征武勳長久〇〇〇〇君」と大書きした<sup>のぼり</sup>幡を何本も立てて、まず氏神様にお参りして武勳長久を祈り、その後小学校の校庭に集まり盛大な歡送式を行った。続いて大きな力強い声で軍歌を歌い小旗を振りながら、半島（地名ハンジマ）の万歳岩までお見送りをした。歡呼の聲に送られていく若者の姿は実に頼もしくも又悲壮であった。

あれから長い年月は流れ去った。万歳岩も無くなった。しかし、あの勇ましい姿、歌声万歳の叫び、旗の波、そして最後の別れを惜しまれる肉親の人々の悲痛な姿は、今も忘れる事は出来ない。」